

「中高年ニート・親の金でキャバクラ通い」～家庭内暴力～

■仮名:Cさん(女性)
■年齢:73才

【息子の変貌】

相談者は73才の母親。48才の息子が30年近くにわたってニートとなり、家庭内暴力が悪化したことから相談に来た。相談者は地元で飲食店を経営していた。息子は高校時代の失恋がきっかけで人間関係につまづき、それ以来不登校が続いた。恩師からの働きかけもあり、なんとか高校は卒業できたものの、卒業後は働かず家に居ることが多くなっていったという。息子が20才になる頃、夫が倒れ、自宅で介護が必要になった。自営業で仕事を抱えながら自宅介護を始めることになった相談者は、介護もろくに手伝わず働かない息子に対して急かすようなことを言ったという。本人のためを思っていたことだった。「あなたもそろそろ、何でもいいから仕事に就いて働いたらどうなの」一。母親としては当然の思いだったが、息子はその思いに対し「うるせえ！高校卒業してやっただけでもありがたく思え！」一。そう言って息子は逆ギレし、相談者の髪を掴んで引きずり回し、金属バッドを振り回して暴れたという。「このままだと殺されるかもしれない…」息子の異常行動に身の危険を感じたが、息子が犯罪者扱いされることを気にした相談者は、110番通報することを躊躇った。

【暴力と金の無心がエスカレート】

その後、暴力を振るっても母親が無抵抗なことに味を占めた息子は、その日を境に気に入らないことがあるとすぐにキレて暴れるようになった。行為は次第にエスカレートし、「殺されなくなかったら金をよこせ！」と相談者を脅し、キャッシュカードを奪っては毎回数万円ずつ母親の口座から引き出した金を使うようになった。あとでわかったことだが、相談者が老後のためにとコツコツ貯めたその金で、息子はキャバクラ通いをしていたのだ。その件を息子に問うと、店でキャバ嬢相手に「手相占いをしていた」と答えた一。この息子の場合、働けるのに働かず、親を脅してむしり取った金でキャバクラ通いを続けていたのだから、怒りを通り越して本当に呆れてしまった。普段はニートをしている息子だが、キャバクラに客として通う時は、相談者の金で買った高級ブランドの洋服を着て出かけていたという。そんな生活を続けるうちに夫が亡くなり、相談者と息子の二人暮らしが始まると、息子の暴力や依存はさらに悪化した。来所した際、相談者は心身ともに疲れきり、半ば息子に洗脳された状態だった。

【第三者の介入】

相談者には、身の危険を感じたら躊躇せずに110番通報し、駆け込み寺のパンフレットを置いて家を出ることを勧めた。その数日後、相談者は息子に暴力を振るわれたため、すぐに警察を呼んだ。今までは、「今度やったら警察を呼ぶから」とクギを刺していたつもりだったが、世間体を気にして実行に移したことはなかった。息子のためを思って第三者を介入させなかった(通報しなかった)ことが、実は暴力を容認することに繋がっていたと相談者も気づいたようだった。しかし、今回は警察に通報後、必要最小限の荷物をまとめ、自宅に駆け込み寺のパンフレットを置いて家を出た。それからしばらく、知人の経営する施設で働きながら寮生活を送り、まずは息子の元から退避することができた。相談者が退避してまもなく、息子から駆け込み寺に電話があり、「母が居なくなっからというもの、まともに食事もとれていません。私一人では何もできません。お願いですから母を返してください」と言う。電話の声は、自分より弱い者を虐待する人間と同一人物とは思えないほど弱々しかった。あれから、相談者は寮を出て一人暮らしをはじめ、自営業を再開した。しかし、息子とは今後も離れて暮らす意志は固い。一方の息子は、依存先である相談者(母親)と離れたショックから「心身の不調を来して働けない」として、公的扶助を受けて一人暮らしをするようになった。

今回のケースでは、相談者(母親)を息子から退避させ、その間も一切息子と連絡をとらないように助言した。そして息子に対しては、相談者に用がある場合は駆け込み寺を通して連絡するよう伝えた。さらに、駆け込み寺が証人になった上で「今後一切、暴力を振るわない」「金の無心をしない」ことを盛り込んだ誓約書にサインさせた。